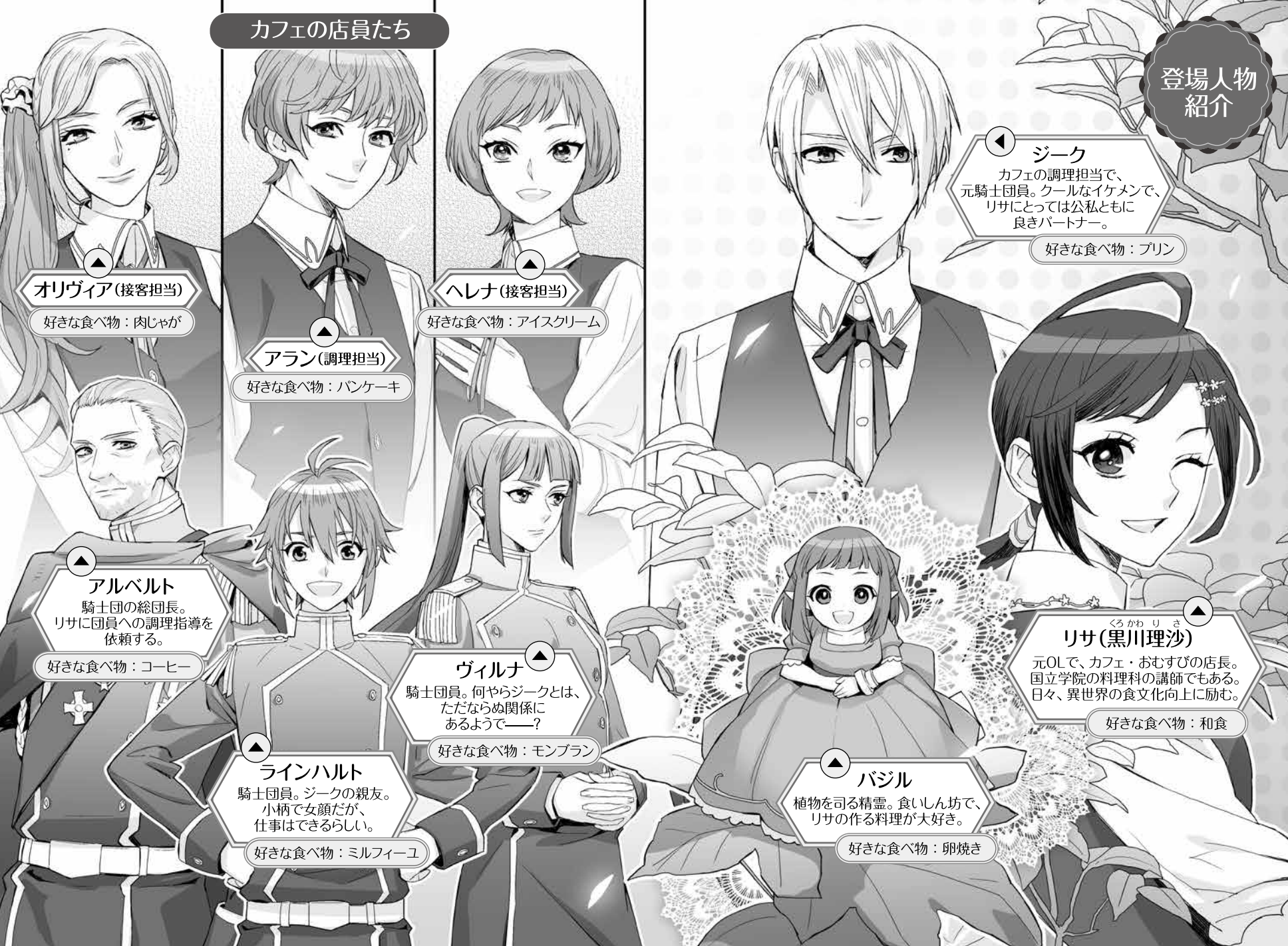
異世界でカフェを開店しました。６


カフェの店員たち
登場人物紹介
ジーク
カフェの調理担当で、元騎士団員。クールなイケメンで、リサにとっては公私ともに良きパートナー。
好きな食べ物：プリン
オリヴィア（接客担当）
好きな食べ物：肉じゃが
アラン（調理担当）
好きな食べ物：バンケーキ
ヘレナ（接客担当）
好きな食べ物：アイスクリーム
アルベルト
騎士団の総団長。リサに団員への調理指導を依頼する。
好きな食べ物：コーヒー
ヴィルナ
騎士団員。何やらジークとは、ただならぬ関係にあるようで――？
好きな食べ物：モンブラン
ラインハルト
騎士団員。ジークの親友。小柄で女顔だが、仕事はできるらしい。
好きな食べ物：ミルフィーユ
リサ（黒川理沙）
元OLで、カフェ・おむすびの店長。国立学院の料理科の講師でもある。日々、異世界の食文化向上に励む。
好きな食べ物：和食
バジル
植物を司る精霊。食いしん坊で、リサの作る料理が大好き。
好きな食べ物：卵焼き

目次

異世界でカフェを開店しました。６　7

ある少年たちの挑戦　207

異世界でカフェを開店しました。６

プロローグ

フェリフォミア王国では例年にないほど暑い夏が、ようやく終わった。青々と茂っていた木々もだんだん秋の色合いに変わろうとしている。

爽やかな風に揺れる街道沿いの木々を眺めながら、一人の若い女性が馬車に揺られていた。

彼女が乗っているのは、街から街へ長距離を移動する乗合馬車だ。

八人乗りの馬車には、彼女の他に幼い少女とその母親、そして一組の老夫婦が乗車しており、壮年の御者が二頭の馬を巧みに操っていた。

先程までおしゃべりしていた少女が眠りに落ちてからは、車内は穏やかな静寂に包まれ、馬の蹄の音と車輪が回る音だけが聞こえている。

「皆さん、もうすぐ到着ですよ」

御者が眠っている少女を気遣い、声を抑えながら言った。

その声に促されるように、女性は前方を見る。

すると、小高い丘の上にそびえ立つ王城が見えた。街道を行く馬車や人の数も増え、いよいよ街が近づいているという実感が湧いてくる。

馬車が徐々に速度を落とし、やがて停車した。

そこは王都の入り口にある停留所で、乗合馬車や貨物用の大型馬車が多く停まっていた。

「王都に到着しました。忘れ物にお気を付けて」

一足先に馬車から降りた御者が、客室のドアを開けて声をかけてきた。

ドアの近くに座っていた老夫婦がゆっくりと降りていくと、御者が彼らの荷物を下ろす手助けをする。

馬車が停まったことで自然と目が覚めたのか、少女が眠たそうに目をこすりながら周囲をキョロキョロと見回す。

その様子を、女性は微笑ましく見ていた。

道中で仲良くなった少女との別れは惜しい。だが、彼ら母娘にも、そして自分にも、向かうべき場所がある。

またね、というように少女に手を振ると、女性は大きなトランクを軽々と持ち上げ、馬車を降りた。

狭い客室から外へ出た解放感に、大きく伸びをする。そしてトランクを持ち直し、彼女は歩き出した。

「……帰ってきた」

数年ぶりに見る街並みは懐かしく、自然と呟きが漏れる。かつて苦楽を共にした仲間たちの顔が次々と思い浮かぶ。

彼らと会うのを楽しみにしながら、彼女は軽やかな足取りで王都の雑踏の中へと歩き出した。

第一章　謎の美女が来店しました。

「ヘレナちゃん、温かいカフェオレ頂戴！」

店に入ってきた常連の男性客が、カウンターの中で作業をしている女性店員に言った。

オレンジ色のショートヘアが似合う女性店員――ヘレナは、突然の注文にも慌てることなく、男性客に笑顔を向ける。

「かしこまりました」

ここはフェリフォミア王国の王都に店を構える、カフェ・おむすび。

小さな店でありながら、見たこともないおいしい料理が食べられると評判である。

今日もランチタイムを過ぎているにもかかわらず、ほぼ満席だった。

ヘレナは店内の様子に気を配りつつ、カウンター内に設置してある簡易コンロで、水とミルクをそれぞれ加熱していく。

その間に、コーヒー豆の準備を始めた。

あらかじめ焙煎してあるコーヒー豆を計量スプーンで掬い、手挽きのコーヒーミルに入れていく。

するとカウンターに座っている先程の男性客が、何やらそわそわし始めた。

そんな彼の様子をクスリと笑い、ヘレナはコーヒーミルを差し出す。

「どうぞ。ゆっくりお願いしますね」

「了解！」

男性客は子供のように嬉しそうな顔で返事をした。彼がコーヒーミルのハンドルを回したがるのは、いつものことだ。

コーヒーミルを受け取った男性客は、さっそく上部のハンドルを回し始めた。ゴリゴリという鈍い音と共に、香ばしいコーヒーの香りが広がっていく。

やがてハンドルを回しても音が鳴らなくなったところで、ヘレナは男性客からコーヒーミルを返してもらった。

そして、下部についている引き出しから粉砕されたコーヒー豆を取り出し、用意していたドリップ用のネルフィルターに入れる。

そこへ万遍なくお湯をかけて蒸らしてから、再びお湯を注ぐ。カフェオレには濃い目のコーヒーが合うので、ゆっくり時間をかけてドリップしていく。

ドリップしたコーヒーをカップに移し、温めておいたミルクを注げば完成だ。

「お待たせしました、カフェオレです」
ヘレナがカフェオレの入ったカップを男性客の前に置いた。
「ありがとう。いや～、いつ見ても手際がいいね」
あっという間にカフェオレを作り終えたヘレナに、男性客は感心した顔で言う。
そんな彼に微笑むと、ヘレナは別の仕事に取り掛かった。
その頃、もう一人の女性店員がカウンターの端で仕事をしていた。テイクアウト用の小窓越しに、外にいる女性客とやり取りをしている。
「えーっと、メイチのタルトとチーズケーキ、あとプリンを二つで！」
小窓の下には店の外からも見えるガラスのショーケースがあり、女性客はそこに並べられたケーキを指さしながら注文していた。
「かしこまりました」
ミルクティー色の髪をした女性店員――オリヴィアは、おっとりした笑みを浮かべた。そして、注文されたケーキをショーケースから丁寧に取り出していく。
それを紙製の箱に詰め終えると、女性客に中身を見せた。
「こちらでお間違いないですか？」
「はい！」
きちんと並べられたケーキを見て、女性客は嬉しそうに頷いた。

オリヴィアは彼女から代金を受け取り、きちんと蓋をした箱を渡す。
「ありがとうございました」
ケーキの入った箱を大事そうに抱えて、女性客は帰っていった。
その時、出来上がった料理を手に、厨房からもう一人の女性店員が出てくる。
長い黒髪を一つに結った女性店員は、パンケーキがのったお皿を持って、注文伝票に書かれた番号の席に向かった。
「お待たせいたしました、パンケーキでございます」
彼女がテーブルにお皿を置くと、二人組の若い女性客は、パッと表情を明るくした。
「わぁ！」
「おいしそう!!」
お皿にのっているのは、見るからにふわふわなパンケーキ。色とりどりのフルーツや、ホイップクリームがトッピングされている。
小さい容器に入ったジャムとシロップも添えられており、お好みで味を変えられるようになっていた。
二人はボリュームたっぷりのパンケーキをシェアするつもりらしく、既にテーブルには取り皿と二人分のカトラリーが準備されていた。
女性店員はテーブルの上に目を走らせ、足りないものがないか確認する。

「ごゆっくりお召し上がりください」
そう言って、彼女は踵を返した。
「ねぇねぇ。今の人が、このお店の店長さんだよね？」
「そうみたいだよ！　話には聞いてたけど、若いんだね～」
他のテーブルから空いたお皿を回収している女性店員を見て、二人の女性客はひそひそと話す。
彼女たちが言う通り、黒髪の女性店員は、このカフェ・おむすびの店長だ。
リサ・クロカワ・クロードという珍しい名前の彼女は、この世界とは別の世界からやってきた。
現在はカフェ・おむすびを経営する傍ら、フェリフォミア国立総合魔術学院の料理科で主任講師を務めている。
リサは空いたお皿を両手に持って、カウンターの中に入った。
「リサさん、すみません」
コーヒーを淹れながら申し訳なさそうに言ったヘレナに、リサは笑顔を向ける。
「ううん、厨房の方は落ち着いてるから問題ないよ～」
すると、ヘレナはほっとした様子を見せた。
「このコーヒーをお客さんに出したら、他にオーダーは入っていないので、もうホールの方は大丈夫です」
「そう？　じゃあ私は厨房に戻るね」

リサはそう言って、カウンターの奥にある厨房へ向かった。
その時、カランカランとドアベルの音が鳴り、入り口のドアが開く。
「いらっしゃいませ」
リサは足を止め、手に持っていたお皿をひとまずカウンターの中に置いた。そして、入店してきた客を誘導しようと入り口へ向かう。
やってきたのは、一人の女性だった。
女性にしてはかなり背が高く、スラリとしていて、濃い紫色の髪を一つに結い上げている。
元の世界にいたファッションモデルのような女性に、リサは目を奪われた。
その女性は店内をキョロキョロと見回していたが、じっと見つめるリサの視線に気付いたのか、こちらに顔を向ける。
リサは目が合ったことにドキッとしつつも、笑みを浮かべて言った。
「お一人様ですか？」
女性は店内を見回していたので、誰かと待ち合わせしているのかもしれないが、リサは念のため人数を確認する。
「あー……待ち合わせ、ではないんですけど……」
女性は困った顔をして、歯切れ悪く答えた。
待ち合わせではないが、人を探している。そう言いたげな女性に、リサはどうしたものかと思い

つつも、ひとまず席へ案内することにした。
「ではカウンター席に……」
「あの、ここでジーク・ブラウンっていう人が働いていると思うんですが」
リサの言葉にかぶせるように、女性は言った。
ジークは、調理を担当しているカフェ・おむすびの従業員だ。そして、リサと同じく学院の料理科で講師も務めている。
今日は授業があるため、カフェには出勤していない。
「申し訳ありません。生憎(あいにく)今日は出勤していないのですが……」
リサはそう答えながら、少し不安になる。
ジークはシルバーブロンドに青い瞳の青年で、整った顔立ちをしている。その上、元騎士団員ということもあり、体格もいい。
感情を顔に出すのが苦手らしくいつも無表情なのだが、それにもかかわらず、女性にすごくモテるのだ。
カフェにもジーク目当ての女性客がいるし、中にはどうにかジークにアプローチしようと、あの手この手で迫る肉食女子もいたりする。
カフェの店長としてだけではなく、リサ個人としても、そういう女性客には困っていた。
なぜなら、リサはジークと付き合っているのだ。

だが相手はお客さんということもあり、表情には出さないように気を付けながら、リサは女性の言葉を待った。
「そうですか。でも、ここで働いているというのは間違いないんですね」
彼女は少し残念そうにしていたが、納得した様子で頷(うなず)く。
「すみませんが、出直します。……あ、ご迷惑でなければ、ジークに『ヴィルナが戻ってきた』と伝えていただけますか？」
「えっ？　はい……」
思わぬ言葉に戸惑いつつも、リサは了承した。
女性は、サッと踵(きびす)を返してカフェを出て行く。ジークにどんな用があるのかと、聞く暇もなかった。
颯爽(さっそう)と立ち去ってしまった彼女の後ろ姿を、リサは呆然として見送ったのだった。

どうやら、あの女性はヴィルナという名前らしい。そして、ジークのことをファーストネームで呼ぶほど親しい関係のようだ。
もやもやした気持ちを抱えつつ、リサは閉店作業をしていた。
「リサさん、お先っす！」
今日の売り上げを帳簿に書き込んでいたリサは、その声に顔を上げる。

そこには、カフェの調理担当である、アラン・トレイルが立っていた。
鶯色の天然パーマが特徴的な彼は、いつもニコニコしている。元は王宮の料理人見習いだったが、自ら希望してカフェ・おむすびに転職したのだ。
最初はかなり苦労していたものの、今ではすっかり一人前に成長したアラン。リサも安心して彼に厨房を任せている。
「アランくん、お疲れ様」
「はい。リサさんも、あまり遅くならないうちに帰ってくださいね」
そう言って、アランは厨房を出て行った。
その背を見送ると、リサは再び帳簿に目を落とす。
やがて記入を終えたリサは帳簿を閉じ、固まった体をほぐすように大きく伸びをした。
「ん～」という気の抜けた声が、自然と口から漏れる。
「……お疲れ様、リサ」
そんな言葉と共に、クスクスという笑い声が聞こえて、リサはパッと後ろを振り向いた。
シンプルなシャツを着た銀髪の青年が、微笑みながらリサを見ている。
「ちょっ！　ジークってば、いつからいたの!?」
リサは恥ずかしさに頬を染め、思わず大声を上げた。
彼こそがジーク・ブラウン。リサにとっては公私共にパートナーと言える男性だ。

「今来たばかりだよ。店の前を通りかかったら、厨房に明かりが点いてるのが見えたから、誰か残っているのかと思って立ち寄ったんだ」
どうやら、学院から帰る途中のようだ。
「だったら、入ってくる時に声をかけてよ！　びっくりした～」
「集中してたみたいだから、邪魔しちゃ悪いと思ってさ」
そう言ってジークはリサに近づき、調理台の上を覗き見る。
「帳簿をつけてたのか？」
「そう。出来る時にやっておかないと、と思ってね」
リサはカフェ・おむすびだけではなく、料理科の責任者でもある。そのため、毎日カフェと料理科を行き来する生活を送っていた。
自分がいない間はジークやヘレナに店を任せているものの、リサでなければ出来ないこともある。帳簿に関してもそうだ。つけるのは誰でも出来るが、最終的な数字の確認をしたり、毎月の売り上げをまとめたりするのは、リサにしか出来ない重要な仕事であった。
リサの言葉を聞きながら、ジークは帳簿に手を伸ばす。そして座っているリサの後ろから調理台に左手をつき、右手で帳簿をパラパラとめくり始めた。どうやら自分が店に出なかった日の売り上げを確認しているようだ。
気付けば、リサはジークの腕の中にすっぽりと囲われていた。

近すぎる距離にドキリとしつつも、その状態のままジークからの質問に答える。
そして今日の売り上げの話になった時、リサはハッと思い出した。
「そういえば、今日ジークを訪ねてきた人がいたよ」
「俺を？」
特に思い当たる人物がいなかったのか、ジークは首を傾げた。
「ヴィルナっていう、背の高い女の人……『ヴィルナが戻ってきた』って伝えてほしいって言ってたけど、知り合いなの？」
リサは腕の中に囲われたまま、ジークを見上げる。彼の顔が逆さまになって見えた。
「ヴィルナ……ああ、あいつか！　知り合いだ」
ジークは懐かしそうに目を細めると、「そうか、戻ってきたのか……」と呟く。
彼女がただのジークファンではないとわかったものの、ジークの嬉しそうな顔を見て、リサの胸にあのもやもやした気持ちが湧き上がる。
せっかくドキドキするシチュエーションなのに、なんだか台無しになってしまった気がして、リサはジークの腕からさっと抜け出した。
「もう遅いから、そろそろ帰らなきゃ」
リサが突然立ち上がったことに驚いた顔をしながらも、ジークは「そうだな」と返す。
「家まで送る」

「……ありがとう」
ジークの言葉にどうにか笑顔で返してから、リサは帰り支度を始めるのだった。

第二章　関係が気になります！

「あの人と、どういう関係なんだろう……」
リサは自室のベッドに寝転び、天井を見上げてため息を吐いた。
あの後、ジークに自宅まで送ってもらったが、ヴィルナとどういう関係なのかは結局聞けず仕舞いだった。
ジークは女友達を作るタイプではない。
リサの知る限り、ヘレナとオリヴィア、それとカフェの隣に立つサイラス魔術具店のアンジェリカぐらいしか、親しくしている女性はいないはずだ。
けれど、ヴィルナという名前を聞いて、ジークはとても嬉しそうにしていた。
怪しさは一切感じなかったものの、リサとしては複雑な気持ちになってしまう。
「マスター？　どうしたんですか？」
天井を見上げるリサの視界に、小さな人影が入り込んできた。

緑の服を着た、体長二十センチほどの女の子。
リサと契約している精霊のバジルだ。
バジルは植物を司る精霊で、リサをマスターと呼び、普段は彼女の肩にのったり近くを飛んでいたりする。
純粋な目でこちらを見つめるバジルに、リサは微笑みかけた。
「ちょっと、ヴィルナさんっていう人が気になってね……」
「昼間、カフェに来た人ですね！」
「そう。ジークを訪ねてきたみたいなんだけど……」
呼び捨てにしているということは、かなり親しい間柄なのだろう。
それならそれで構わないけれど、ジークからどういう関係なのかを説明してくれてもよさそうなものだ。だが、彼からそういう話は一切なかった。
そのことが、余計にリサの頭を悩ませている。
「背が高くて、スラッとしてて、凛とした美人だったなぁ……」
濃い紫色の髪を高い位置で結び、瞳は深い緑色。
日本人らしく凹凸の少ない顔をしているリサとは違い、スッと鼻筋が通った彫りの深い顔立ちだった。
民族的な違いなのだから仕方ないとは思いつつも、リサは劣等感を覚えてしまう。

思考がどんどんネガティブな方へ傾いていくのに気付き、リサはぶんぶんと頭を振った。
「考えても仕方ない！　もう寝よう!!」
考えるのをやめたリサは、布団をバサッとかぶって丸くなる。
そんなリサの様子を、バジルは不思議そうに見つめていた。

――翌日。
この日もカフェの営業日だったが、リサは午後から料理科の授業があるため、途中で抜けることになっていた。
開店準備をした後、ランチタイムの最初のオーダー分だけを手伝うと、リサは料理科へ行く準備を始める。
「じゃあ、後はよろしくね」
厨房で忙しく働いているジークとアランに声をかけると、二人から快い返事がきた。
それに安堵したリサが厨房を出ようとしたところで、オリヴィアがやってくる。
「あの、ジークくんに、お客さんが来てるんだけど……」
「俺に客ですか？」
首を傾げたジークに、オリヴィアは答える。
「ヴィルナっていう女の人で……」

「ああ！　……アラン、悪いけど少し外してもいいか？」
ジークは納得した様子で大きく頷き、アランに声をかけた。
「いいっすよ！」
アランは元気よく答えた。
今店内にいる客のオーダー分は、すべて作り終えている。新たな客が来てオーダーを受けるまでは、多少の時間があるだろう。
ジークは厨房をアランに任せ、ホールの方へ向かった。
そんなジークの行動を黙って見ていたリサだが、内心気になって仕方がない。
料理科に行かなければと思いつつ、こっそりホールを覗いた。
多くの客で賑わう中、ジークはカウンターの端でヴィルナと話していた。
内容までは聞こえないが、親しげに会話をしている二人の姿に、リサは戸惑いを隠せない。あまり口数の多くないジークが、珍しく積極的に話しているのがわかったからだ。
リサの胸に、ちくりと小さな棘が刺さったような気がした。
自分が嫉妬しているということに、リサはすぐに気が付く。昨日から続くもやもやも、嫉妬からくるものなのだろう。
「リサさん、時間大丈夫ですか？」
厨房とホールの間にいたリサに、ヘレナが声をかけてきた。

その声にハッとして、リサは時計を見る。料理科の授業時間が迫っていた。
「ああ、行かないと。あとのこと、よろしくね」
「はい。いってらっしゃい」
ジークとヴィルナの様子は気になるけれど、料理科に向かわなければならない。
今も楽しそうに会話をしている二人を横目に、リサはカフェ・おむすびを後にした。

第三章　もやもやは消えません。

それからというもの、ヴィルナは頻繁にカフェにやってくるようになった。
ずっとジークと話をしているわけではないが、彼の手が空いたり、近くを通りかかったりすると、ちょこちょこ話しかけている。
当然、リサが気にならないはずがない。
情報通のヘレナによれば、ヴィルナは騎士団に所属していて、ジークとは学院の騎士科時代からの付き合いらしい。
そのことについて、リサはさりげなくジークに聞いてみた。
「あれ？　言ってなかったか？」

彼はそう言ってきょとんとした後、ヴィルナのことを話しだした。
「ヴィルナとは学院時代の同級生で、ラインハルトを入れた三人チームで活動することが多かったんだ。騎士団に所属する前の研修先も一緒で、何かと縁があるんだよ」
ラインハルトというのはジークの騎士団時代の同期で、現在は分隊長として王都の警備をしている。
彼の担当する地区にカフェ・おむすびが立っていることもあり、リサも顔を合わせる機会が多く、何かと頼りにしていた。
ジークから、ラインハルト以外の同期の話はあまり聞いたことがない。だから、女の子もいたんだと、リサは今さらながら思った。
ラインハルトの部下にも女性がいるので、考えてみれば当然のことなのだが、リサの中で学院の騎士科は男子校のようなイメージがあるのだ。
フェリフォミア王国では性別に関係なく、どんな職業にも就ける。
けれど、性別による向き不向きがあったり、興味の違いがあったりするので、男女比が偏っている職業も中にはあった。
騎士も、そんな職業のうちの一つだ。
体力が必要な職業であるため、男性の方が圧倒的に多い。だが、女性の細やかさを求められる場面も多々あり、女性騎士も重宝されると聞いていた。

フェリフォミアの騎士団は、リサが元いた世界でいうところの警察と救急隊、さらに軍隊を足したような機関なのだ。
さらに王宮騎士団ともなれば、王族のSPみたいな仕事もしている。
とにかく騎士団の仕事は多岐にわたるので、その分、女性が活躍する場面も多いのだろう。
「ヴィルナは地方の騎士団に配属されたから、それ以来会っていなかったんだが、先日配属替えがあって王都に異動してきたらしい」
そんなジークの説明を、リサは複雑な思いと共に聞いていた。

「こんにちは」
その日も、ランチの客が引いた頃、ヴィルナが入店してきた。
ショーケースに並べるケーキを補充していたリサは、その声を聞いてドキリとする。
空のトレーを持ったまま立ち上がり、入り口を見ると、そこにはヴィルナの姿があった。
「本当に通ってるんだな、お前」
その隣に、赤毛の小柄な青年――ラインハルトがいたので、リサは少し緊張を和らげた。
ヘレナが彼らをカウンター席に誘導する。
リサは厨房に戻る際にカウンター席の横を通り、二人に一声かけた。
「いらっしゃいませ」

なんとなくヴィルナの顔を見ることが出来ず、ラインハルトだけに視線を向ける。
するとラインハルトが顔を上げ、ニコリと笑った。
「リサさん、こんにちは」
どうやら今日は二人とも休みらしく、私服を着ていた。
「ゆっくりしていってくださいね」
リサも笑みを浮かべてそう言い、厨房へ向かう。
ヴィルナの傍を通り過ぎる時、一瞬目が合った気がしたが、そのまま立ち去った。

厨房に入ってから、リサは自分の態度を少し後悔していた。
――感じ悪く思われちゃったかな……
視線が合った気がしたにもかかわらず、無視して立ち去ったため、ヴィルナに悪い印象を持たれてしまったかもしれない。
いくら彼女がジークと親しくて、気になる存在であるとはいえ、それはリサの個人的な感情だ。
お客さんに対してあんな態度を取るべきではなかったと反省する。
声をかけた時も、彼女の顔を見ることが出来ずラインハルトだけを見ていたので、なおさら感じが悪いだろう。
リサは情けない気持ちになって、ため息を吐いた。

「どうしたんですか？　リサさん」
ため息が聞こえたのか、ジークが心配そうに尋ねてくる。仕事中なので敬語だ。
「……ううん、なんでもない。あ、ラインハルトくんとヴィルナさんが来てるよ？」
「あの二人、また来たのか」
「二人とも私服だったから、今日はお休みみたい」
「仕事の日だけでなく休みの日にも来るって、暇なのか？　あの二人は……。まあ、仕事中に来たらもっと問題だけど」
やれやれと肩を竦めるジークに、リサは苦笑を浮かべる。
言葉の端々から仲の良さが感じられ、リサは少し疎外感を覚えた。ヴィルナが現れてからというもの、感情の振れ幅が大きくなった気がする。
「料理を出すついでに、一言挨拶してきます」
そう言って、ジークはパンケーキがのったお皿を手に、厨房を出て行く。
その後ろ姿がホールに消えたのを見て、リサは再びため息を吐いた。

しばらくすると、店内が混んできたのか、厨房には料理のオーダーが立て続けに入った。
それに対応していたリサは、ジークがなかなか戻ってこないことに気付く。
サンドイッチをお皿に盛り付けると、そのお皿を持ってホールの様子を見に向かった。

「だからさ、あの時は俺じゃなくて、ジークのせいで失敗したんだって」
「そうだったか？」
「いや、ラインハルトも一緒だったじゃない！」
ラインハルト、ジーク、ヴィルナの三人は、思い出話に花を咲かせていた。騎士団時代の話をしているのか、実に楽しそうな雰囲気だ。
そんな空気に水を差したくないと思うリサだが、ジークはまだ仕事中なのだから、早く厨房に戻ってほしい。
その気持ちの中にはヴィルナに対する嫉妬も少なからず含まれているが、厨房が忙しいので、やはり注意すべきだろう。
「あの、ジークくん」
思い切って声をかけると、三人の視線がリサに集まった。
「オーダーが入ってるから、そろそろ……」
リサが言葉を濁しつつも戻ってほしいことを伝えると、ジークはハッとした。
「すみません、戻ります」
申し訳なさそうに言うジークに、ヴィルナはニヤニヤした笑みを向けた。
「ジーク、怒られた～」
茶化す彼女に、すかさずラインハルトがツッコむ。

「ヴィルナ、お前なぁ……。ジーク、引き留めて悪かったな」
そう言って、ラインハルトはジークに肩を竦めてみせた。
「いや、俺もつい話し込んでしまった。ゆっくりしていってくれ」
ジークはカウンター席を離れ、空いた食器を持って厨房へ向かう。
その様子を見たリサは、せっかくの楽しい時間を邪魔してしまったのではないかと、後ろめたい気持ちに駆られる。
接客用の笑みを浮かべて二人に会釈をすると、自分も厨房へ戻った。

第四章　見てしまいました。

フェリフォミア国立総合魔術学院は、この秋から新年度を迎えた。
去年新設された料理科も今年で二年目。一年生だった生徒たちは二年生になり、新入生が入ってきた。
それに伴い講師の人員も増え、不慣れなことの連続で何かとバタバタしていたが、ひと月経ってようやく落ち着いてきた頃である。
明日は料理科が休みで、カフェの方も定休日。せっかくなのでジークとどこかに出かけようかと、リサは考えていた。
料理科からの帰り道、カフェに寄ったリサは、一人残っていたジークにそのことを話す。
「ねえ、明日って空いてる？　久しぶりにどこかへ行かない？」
リサの言葉に頷きかけたジークは、何かを思い出したのか、「あ」と言って固まる。そして、気まずそうな顔をした。
「あー、明日はちょっと予定が入ってて……悪い」
すまなそうに言うジークに、リサは笑って手を振る。
「ううん、私ももっと早く言っておくべきだったから、気にしないで」
せっかくの休日を一緒に過ごせないのは残念だが、予定があるなら仕方ない。せめてこのあと自宅まで送ってもらう間だけでも、ジークとの時間を楽しむことにした。

翌日。
リサはいつもより遅い時間に起床した。
予定がない休日は久々なので、起きる時間を気にせずたっぷり二度寝したのだ。
ぽっかりと空いてしまった時間をどう過ごそうかと悩む。
そしてブランチを食べてから、ふらっと街へ出かけることにした。
目的は特になかったが、あまり行ったことのないエリアのお店を見てみようかなと思い、カフ

ェ・おむすびがある道具街とは反対側に足を運ぶ。
やがて辿り着いたのは、雑貨屋や文具店などが立ち並んでいる地区だ。ここも道具街と同じく、王都が出来たばかりの時からあるようで、老舗が多い。
リサはさっそく目についた書店に立ち寄ってみる。
ウィンドウには新刊らしき本が並び、宣伝のキャッチコピーが貼り出されていた。
歴史を感じさせる鈍色のドアノブを押して店内に入ると、壁一面に本が並んでいた。それは吹き抜けになった二階まで続いている。
狭い空間を目いっぱい使っているようで、ぎっしりと本が詰まった棚に圧倒された。
面白そうな本はないかと、リサは背表紙を眺めながら本棚の間を歩いていく。
「マスター」
耳元で精霊のバジルが囁いた。
「どうしたの？」
リサが小さな声で聞き返すと、バジルは目をキラキラさせて本棚を指さす。
「これ！　この植物の本、お家にあるのとは違いますよ！」
今リサたちがいるのは専門書のコーナーらしく、事典や図鑑のような本ばかりが本棚に収まっている。
バジルが指さす本は、植物の本がまとめて並んでいる棚にあった。同じ列には、リサが所有しているのと同じ本も置かれている。
「本当だね。新しい図鑑かな？」
リサも興味を惹かれたので、本棚から抜き出して開いてみる。その横から、バジルが興味津々な様子で覗き込んだ。
その本はリサが予想した通り、新しい植物の図鑑だった。描かれているのは、見たことのない植物が多い。
奥付を見てみると、知らない地名が書かれていた。
「外国の図鑑なのかな？」
フェリフォミアの王都に住み始めて数年が経ち、近隣地域の地名は大体覚えている。けれど、国中の地名を知っているわけではないので、リサは首を傾げた。
図鑑をパラパラとめくるリサの手元を見ていたバジルは、とあるページを指さした。
「この木はフェリフォミアには生えてないですね。一年を通して寒い地域でしか育ちません。他にもフェリフォミアではあまり見ない植物が多いので、もしかしたら違う国の本なのかもしれないです！」
楽しそうに図鑑を眺めるバジルの姿を、リサは微笑ましく思った。
そっと本を閉じると、バジルに笑顔を向ける。
「じゃあ、この本買って帰ろう」

「本当ですか!?　……あ、でもマスター……」
バジルは嬉しそうな表情から一転、顔を曇らせた。
彼女が心配しているのは、本の代金のことだろう。こちらの世界では、本は割と高価なのだ。ジャンルによってピンキリではあるが、リサが今手にしているような専門書は装丁もしっかりしているので、総じて高額だった。
「ちょうど持ち合わせもあるから大丈夫。それに、新作料理に使える植物が見つかるかもしれないしね。一緒に図鑑を見ながら、色々教えてくれたら嬉しいな」
リサがそう言って笑いかけると、バジルは顔を輝かせて「任せてください！」と自分の胸を叩いた。

気難しそうな店主に代金を払ったリサは、バジルを肩にのせて店の外へ出る。
そして、次はどこへ行こうかと考えた。
「バジルちゃん、どこか行きたいとこ……」
リサがバジルに意見を聞こうとした時、よく見知った人物が目に入る。
通りの少し先にいるのは、ジークだった。
誰かと一緒にいるようで、顔を横に向けて話している。その相手は人ごみに隠れて見えなかったが、二人が歩き出した時、その人物の顔が露わになった。

それは、なんとヴィルナだった。
「なんで……」
リサはショックを受け、呆然と立ち尽くす。
――ジークの予定っていうのは、ヴィルナさんとの約束だったの……？
笑顔のヴィルナが、ジークを肘で小突いている。その様子からは、気安い仲であることが窺い知れた。
スラリとしてスタイルのいいヴィルナは、背の高いジークと並んでも見劣りしない。それどころか、すごくバランスが取れているように見えた。
――もしかして、学生時代に付き合ってたのかな……
ジークが女性と接するのがあまり得意ではないというのは、リサも知っている。しかし、ヴィルナに対してはそうではないみたいだ。
それを考えると、もしかしたらと思ってしまう。
何より、ジークは恋人であるリサとの時間より、ヴィルナとの約束を優先したのだ。先約を守るのは当然だと思いつつも、リサは傷つく。
二人はそのままリサがいるのとは反対の方向へ歩いていき、やがて見えなくなった。
「……マスター？」
リサの肩にのっていたバジルが飛び立ち、立ちすくんでいる彼女の顔を心配そうに窺う。

リサはどうにか笑みを返したが、もう街を散策する気分にはなれない。
本の入った紙袋を抱えて帰路に着くのだった。

第五章　振り向かせるにはアピールが必要です。

リサは自室のテーブルの前に座り、ハァとため息をこぼした。
テーブルの上に広げている図鑑の内容は、全くと言っていいほど頭に入ってこない。
先程見た光景が頭に焼き付いて、なかなか消えなかった。そのせいで、どんどん悪い想像ばかりが膨らんでいく。
かつてジークとヴィルナは付き合っていたのだろうか。
そうだとしても別に構わない。もやもやしてしまうことに変わりはないけれど、昔のことだと思えば納得できる。
しかし、いわゆる「元サヤ」に戻ったのだとしたら……
もしそうならば、ジークは浮気をしていることになるので、ヴィルナと会うことをリサに言わなかったのも頷ける。
もちろんすべてはリサの想像に過ぎないが、突然ジークと親しい女の子が現れれば、多少なりとも疑ってしまうのは仕方ないだろう。
醜い嫉妬はしたくないけれど、嫌な想像を止めることも出来ない。
キラキラした目で図鑑を眺めていたバジルは、主の憂鬱そうなため息を聞いて顔を上げた。
「マスター、元気ないですね……」
気遣わしげな視線を向けてくるバジルに、リサは苦笑した。
「うん……色々考えちゃって」
「色々、ですか？」
「ジークのことが好きなのに疑っちゃったり、他の女の子に嫉妬しちゃったりね……」
「好き、疑う……」
不思議そうに呟き、バジルは首を傾げた。
ややあって、まっすぐな目でリサを見上げる。
「バジルはマスターが好きで、信じていますよ？　マスターは違うのですか？」
子供のように純粋なバジルに、リサは微笑む。
「私もバジルちゃんのことは好きだし、信頼もしてるよ。もちろんジークもそうだけど……そうじゃないところもある……というか、私が勝手に不安になってるだけなのかも」
「では、ジークさんに不安なんです～って言ってみたらどうですか？」
「そうねぇ、それが出来たらいいんだけど……」

バジルのアドバイスに、リサは苦笑する。
ヴィルナは元カノなのかとジークに聞くのは難しい。まして浮気してるのかなんて、ますます聞き辛い。
なおも首を傾げているバジルに、今度はリサが聞いてみた。
「バジルちゃんは、もし好きな人に、自分よりも好きな人が出来たらどうする？」
バジルは腕を組んで、うーんと考え始める。
やがて、パッと顔を上げ、リサに視線を向けた。
「バジルなら、好きな人に自分のいいところをアピールします！　好きな人の好きな人よりも、バジルの方を好きになってもらえるように頑張るのです!!」
大きく両手を広げて、自分の存在を目立たせるようなジェスチャーをするバジル。
その様子がなんとも可愛らしくて、リサはクスリと笑った。
「アピールねぇ……」
自分の誇れるところはどこだろうかと、リサは考えてみる。
真っ先に頭に浮かんだのは、やはり料理だった。
ふと、ジークがカフェで働かせてほしいと言ってきた時のことを思い出す。
ジークは、「あなたの作るお菓子が好きなんだ」とリサに言った。
その頃は、まさか付き合うことになるとは思いもしなかったが、まるで愛の告白をするかのように言ったジークに、リサはドキドキしてしまったのだ。
「うん、私にはやっぱりこれしかないね」
リサは深く頷き、決意を胸に立ち上がった。

翌日。
リサはいつもより早起きをしてカフェ・おむすびに出勤した。
誰もいない店内に入り、二階でカフェの制服に着替えて厨房へ向かう。
厨房に入ってまず最初にすることは、手を洗うことだ。爪ブラシを使って、爪の中まで丁寧に洗っていく。
それが終わると、リサは厨房の奥にある倉庫へ向かった。その四畳半ほどの空間には、常温で保存できる食材が置かれている。
リサはその中から目当ての食材を探し、これから行う試作に必要な分を取ると、厨房に戻った。
調理台の上に、倉庫から取ってきた食材をゴロゴロと並べる。
ブブロンという栗に似た木の実。
かぼちゃに似たプルエ。
サツマイモに似たナナット芋。
どれも秋の味覚の代表格ともいえる食材だ。リサはこれらを使って、モンブランを作ろうと考え

ていた。
カフェ・おむすびのメニューの中に、モンブランは既にある。
定番であるブブロンを使ったものや、少し珍しいピンク色の芋を使ったものなどが、日替わりでショーケースに並ぶ。
しかし、旬の食材を使ったメニューなので、この機会に焦点を当ててみるのもいいかもしれないと思ったのだ。
「メレンゲ生地とタルト生地、パイ生地……あと基本のスポンジか」
リサは、土台となる生地から見直そうと考えていた。
今まで店頭に並んでいたモンブランの土台はスポンジケーキだ。他のケーキもスポンジを使っているので、作る時の効率を考えてそうしていたのだが、思い切って土台から変えてみたいと思っている。
まずは卵を割り、卵白と卵黄に分ける。そして卵白だけをボウルに入れ、魔術具のミキサーにセットした。これでメレンゲを作るのだ。
ミキサーでメレンゲを作っている間に、他の作業に移る。
タルト生地とパイ生地は、材料がほとんど一緒だ。小麦粉、バター、水、砂糖、それに塩を少々。
タルト生地の場合はさらに卵黄が加わり、その分だけ水を減らす。
まずはタルト生地を作ることにした。

ボウルに小麦粉、砂糖、そして塩をひとつまみ入れ、そこに一センチ角に切ったバターを加えて、手で混ぜる。混ぜるというより、バターと粉類を指ですり合わせていくという感じだ。
ぼそぼその状態になったところで卵黄と水を加え、生地をまとめていく。
ひとまとまりになったら、濡らして固く絞った布巾をボウルにかぶせ、冷蔵庫でしばらく寝かせる。
次は、パイ生地作りだ。
工程はタルト生地とほぼ一緒。ボウルの中で、バターと粉類を指ですり合わせていく。ただしパイ生地の場合は、バターの粒が半分くらい残る程度で止めておくのがポイントだ。
その状態で水を加えてざっくりと混ぜたら、ひとかたまりにまとめて、タルト生地と同じように濡れ布巾をかけて冷蔵庫に入れる。
続いてメレンゲ生地を作る。
ミキサーにかけていた卵白はしっかりと泡立てられ、ふわふわしたホイップ状になっていた。
そこに砂糖を加え、さらに角が立つくらいまで泡立てる。
そうして出来上がったメレンゲに、ナッツを粉末状にしたものと粉糖を数回に分けて加え、泡を潰さないようにヘラでざっくりと混ぜ合わせた。
そこまで出来たら、丸い口金をセットした絞り袋に詰め、オーブンの天板に絞っていく。時計回りにくるりと絞り、直径五センチくらいの渦巻き状の円にするのだ。

それをあらかじめ熱しておいたオーブンに入れ、焼き上げていく。
リサがメレンゲ生地をオーブンに入れ、タイマーをセットしたところで、入り口の方から物音が聞こえた。
ややあって、ヘレナが厨房に顔を覗かせた。
「おはようございます、リサさん。早いですね」
「おはよう、ヘレナ。ちょっと作りたいものがあって」
「そうなんですか。今回も楽しみにしてますね」
そう言って、ヘレナは着替えのために二階へ向かった。
その後ろ姿を見送ると、リサは作業を再開する。
まずは、寝かせておいたパイ生地を冷蔵庫から取り出す。
調理台に打ち粉をして、その上に生地をのせ、めん棒で伸ばしていく。
一センチほどの厚さの長方形に伸ばしたら、生地を三つ折りにする。折り重ねることで層が出来、焼き上がった時にサクサクとした食感が出せるのだ。
その生地の向きを変え、また伸ばし、三つ折りにして……という作業をさらに五回ほど繰り返す。
すると初めは凹凸があり、ぼそぼそしていた生地が、滑らかになる。
最後に五ミリほどの厚さに伸ばし、それをパイ型に敷いていく。縁が傾斜状になった、直径六センチの浅いパイ型だ。

パイ生地を型に敷いたら、フォークで万遍なく穴を空けていく。これは空気穴となり、焼いた時歪に膨らむのを防いでくれる。
そこまで出来たら、メレンゲ生地を焼いているのとは別のオーブンに入れ、焼いていく。
ちょうどメレンゲ生地の方は焼き上がったようなので、焼き上がりを確認して、オーブンから取り出した。
うっすら焼き色のついたメレンゲ生地からは、甘く香ばしい匂いが漂ってくる。それをケーキクーラーにのせて、しっかりと粗熱を取っておく。
次に、タルト生地を冷蔵庫から取り出す。
こちらはパイ生地とは違って折りたたむことはせず、そのまま薄く伸ばして型に敷いた。タルトの型もパイ型と同じく直径六センチの大きさだが、縁がひだ状になっている。
パイ生地と同様、フォークで穴を空けてから、オーブンに入れた。
「おはようございます！　お、何作ってるんですか？」
「おはよう、アランくん。ちょっと新作……っていうほどでもないけど、試作中なの」
朝から元気いっぱいに出勤してきたアランに、リサは小さく笑った。
アランはケーキクーラーの上で冷ましているメレンゲ生地や、オーブンの中を、興味深そうに眺めている。
「たぶん、賄いの時間には間に合うと思うから、期待してて」

リサの言葉を聞いて、アランはウキウキした様子で仕事を始める。今にも鼻歌を歌いだしそうなので、リサはますます笑みを深めた。

アランが開店準備を始めたのを横目に見ながら、リサはモンブランの要であるクリーム作りに入る。

栗に似たブブロンは普段からモンブランに使っているため、甘露煮を作り置きしてある。今日もそれを使うことにした。

まずは甘露煮のブブロンを小さく刻んで鍋に入れ、生クリームと一緒にコンロで加熱する。沸々と泡が立ってきたら、木べらで潰すようにかき混ぜながら、水分を飛ばしていく。

ブブロンが柔らかくなりドロッとしてきたら、火を止めて鍋の中身をブレンダーに入れる。香りづけに蒸留酒を少しだけ加え、ブレンダーでさらに撹拌するのだ。

そしてペースト状になったものを、目の細かいザルで裏ごしする。

ここでしっかり裏ごししておかないと、絞った時に口金に詰まってしまうことがあるので、塊が残らないよう丁寧に作業をする。

これでブブロンのクリームの出来上がりだ。

かぼちゃに似たプルエ、サツマイモに似たナナット芋は、洗ってから適度な大きさに切って蒸しておく。

蒸して柔らかくなったら皮をむき、ブブロンと同じように生クリームと一緒に煮ていく。

木べらで潰しながら加熱し、水分が少なくなったら、蒸留酒を加えてブレンダーでペースト状にする。

最後に裏ごしすれば完成だ。

集中して作業をしていたリサがふと横を見ると、いつの間にかアランとジークがクリームを作るリサの様子を見ていた。

「わっ！　ジークくんも来てたんだね、おはよう」

リサが慌てて挨拶すると、ジークは呆れたように肩を竦めた。

「おはようございます。だいぶ前に来てましたよ」

ジークの顔を見た途端、リサの頭に、昨日の出来事が浮かんでくる。

少し気まずく思っていると、それが顔に出てしまったのか、ジークが心配そうな顔でリサを見つめた。

リサは笑顔を取り繕ってから口を開く。

「今、新しいモンブランを作ってるんだ。賄いの時、みんなに試食してもらおうと思って」

そう言って、作業を再開する。

するとジークも笑みを浮かべ、「楽しみにしてます」と言って、自分の仕事を始めるのだった。

第六章　秋の味覚はおいしいです。

カフェ・おむすびの二階は、かつてこの建物を使っていたお店の主人が生活していた場所だ。
そして今現在は、カフェのメンバーが休憩を取ったり着替えをしたりするためのスペースになっている。
ダイニングにはテーブルセットが置かれていて、開店前にここで賄(まかな)いを食べるのが習慣となっていた。
今日の賄いは、アランが作った海鮮のパスタとサラダ。メンバー全員でそれを食べると、次はリサが作ったケーキの試食に移った。
ダイニングテーブルに並んでいるのは、数種類のモンブランだ。
クリームの色はどれも黄色だが、微妙に濃淡が違う。種類ごとに刻んだナッツやブブロンの甘露煮(かんろに)をのせてあるので、見分けがつくようになっていた。
「土台をメレンゲ、タルト、パイの三種類、クリームをブブロン、プルエ、ナナット芋の三種類で作ってみました。食感や味のバランスを見て組み合わせを決めたいので、どんどん意見を言ってください」

リサが作ったモンブランは、計九種類。各三種類の生地とクリームをそれぞれ組み合わせたのだ。
一人一個ずつ試食するとなると量が多すぎるので、一口分ずつフォークで切り分け、試食してもらうことにした。

ヘレナは、自分が試食する分をフォークで取り分けながら、リサの様子を見ていた。
リサが突然、新作料理を考えることは、今に始まったことではない。だが、今回は何か意図があるのでないかとヘレナは推測していた。
特に理由はないが、女の勘とでもいえばいいのだろうか。
最近カフェにやってくるようになったヴィルナのことが、ヘレナは引っかかっていた。
ヘレナは接客担当という立場上、お客さんと話をすることが多い。ヴィルナは基本的に一人で来店することもあり、カウンター越しによく世間話をしていた。
彼女はジークと学生時代からの知り合いらしいので、ジークという共通の話題があって、ヘレナとしても話しやすい。
けれど、リサとはあまり話をしている様子がなかった。
もちろん挨拶(あいさつ)を交わしたり、オーダーを聞いたりと、必要最低限は言葉を交わしているのだが、他の客に比べると明らかに少ない。
おそらく避けているのはリサの方だと、ヘレナは思っていた。

リサは誰とでも気さくに話す。あまり店員と話をしたがらない客もいるので、そういう場合は空気を読んでそっとしておくが、そうでない場合はリサから世間話をふることが多いのだ。

そんなリサが、ヴィルナとは距離を置いている。ヘレナの予想では、ジークのことでわだかまりがあるのだと思う。

リサのいる前で、ジークがヴィルナと仲良さそうに話していることがたびたびある。

再会した旧友と親交を深めるのは大いに結構だが、それを恋人であるリサが快く思わないのも当然だろう。

そんなことを考えながら、ヘレナは誰にも気付かれないようにハァと息を吐いた。

適度な嫉妬は、恋愛のスパイスになると思う。ヘレナも人並みに恋愛をしてきているので、それはわかる。だが、リサがヴィルナとジークの仲に嫉妬しているとしたら、その辛さも同じ女としてよくわかった。

しかもリサがここに来て、いきなり新作のモンブランを作った。何やらいつも以上に仕事に燃えているリサを見ると、どういう心境の変化なのかと、なんだか心配になってくる。

ともかく、今は余計な口を出すタイミングではないし、リサもジークも自分より大人なのだ。だから黙って二人のことを見守ろうと思いながら、ヘレナは新作のモンブランを頬張るのだった。

「うん、この三種類でいこう！」

立ち読みサンプルはここまで

試食から二日後。閉店後の厨房で最後の試作を終えたリサは、自信をもって頷いた。

カフェのメンバーからの意見も取り入れて、モンブランの生地とクリームの組み合わせを決めた。タルト生地に、水気の多いプルエのクリームをのせたモンブラン。パイ生地に、あっさりしたナット芋のクリームをのせたモンブラン。メレンゲ生地に、ブブロンの渋皮煮で作ったクリームをのせた、少しビターな風味のモンブラン。

これに元々販売していたモンブラン――スポンジケーキにブブロンのクリームをのせたもの――を加えた四種類を販売することにしたのである。

今日の試作には、ジークも付き合ってくれていた。

「この四種類を販売するのか」

調理台に並べられているモンブランを見て、ジークが呟いた。

今まで同じケーキを数種類同時に販売することはなかったため、どうなるのか想像がつかないのだろう。

「ねえ、食べ比べしてみない？」

リサがそう提案すると、ジークは頷いた。そして二人分のフォークを用意してくれる。

それぞれ好きなものを選び、フォークで切り分けて口に運ぶ。

ジークが選んだのは、メレンゲ生地にブブロンの渋皮煮で作ったクリームをのせたものだ。

リサはタルト生地にプルエのクリームをのせたモンブランを味わいつつ、ジークの顔を窺う。